



TITLE:

質疑應答

AUTHOR(S):

CITATION:

質疑應答. 地球 1927, 7(6): 493-494

ISSUE DATE:

1927-06-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183274>

RIGHT:

の中ゴムが價格増加のため二百五十萬弗からも増加した、領内最大多數の公民はこのゴムで生活してゐるのである、政府はサゴの栽培をすすめたけれども、ゴムの方が利益が多い、ゴムの外に、カツチ、シエルトン、サゴ粉、胡椒等主として熱帶農産物が輸出される。

○歐米主要國產炭額と英國炭

最近倫敦の商務省は

歐米の主要石炭產出國の一九二五年及一九二六年中の毎月平均石炭產額を對比した表を出した。

月別產額單位二千噸	佛	ザール	白	獨	米	英
一九二五、一ヶ月平均	三八七	一、〇六五	一、八七〇	一、八四四	一、九四三	三、五五
一九二六、一ヶ月平均	四、三六	一、三三	一、〇七六	一、九四九	三、三三〇	三、五五

本比較表によるときは、英國炭坑夫組合首領等が力説した英國石炭は世界的に必要缺くべからざるものであるとの議論が最早過去の夢であることが明かとなつたのみならず、世界は英吉利の炭坑罷業によつて何等不便を感じなかつたと見てよい、一九二六年に英國内には五月から十一月まで炭坑夫の罷業があつて輸出が出来なかつた、が從來英國石炭の最大顧客である所の佛蘭西の如き五月には三百八十萬四千噸であつたのに、漸次増加して其急を救ひ、十二月には四百四十八萬噸になつた、白工義の如きも五月と十二月の產出高は百八十一萬噸から二百三十三萬八千噸に増加し、獨逸も亦千五十萬噸より千三百五十萬噸になつた、米國も五月には四千二百萬噸

であつたのに十二月には五千八百二十五萬噸に増加した、これ皆、英國炭の產出減少、輸出不振によつて、世界各國が競ふて其の埋め合をやつた証據である。英國の炭坑罷業は一九二六年十一月に終つて十二月には一九、五五二千噸を出したがさればとて是等諸國が、其の石炭產出額を増加せんが爲めに施したる設備若くは努力が、そのために中止されるといふことはないのであるから、却つて其の増加石炭に對する市場を求むることに就て、益々奮闘努力すると思はれる。蓋し、英國石炭業者の立場は愈困難となつてきたのである。

質疑應答

(問) 三河灣の成因

野口喜一

(a) 伊勢海との成因上の關係如何
(b) Median Line との關係

(答) 知多灣及び渥美灣を總稱せる三河灣は渥美半島に依つて太平洋と距てられて居る。此の渥美半島は實に西南日本外帯に屬する地域であつて、渥美灣北岸は花崗岩及花崗片麻岩の廣き露出に依つて西南日本内帯に屬する地域たる事が明瞭である。従つて矢部博士の所謂 Median Line は實に渥美灣の何處かを北北東より西南に走つて居るのであつて、大觀すれば瀬戸内海の東方延長に當る内海である。然し此處が三河灣及伊勢灣として存在する理由は若狹灣、琵琶湖及び此の伊勢灣、三河灣を含む地域が東南に延長する陷沒地帯である

事を等閑して考へる事が出来ない事は明瞭である。而して研究者は西南日本内帯が凡て城嶺東方より大阪を連ぬる線より以東に於いて次第に隆起し日本アルプスに至らんとするスエートに於いて一度挫折して此の若狭灣、琵琶湖及び伊勢灣の陥没地帯を構成せしものなる事を知らなければならぬ。然らば濃尾地震、虎姫地震、北但及丹後地震の構造地質學意義に就いても必ずや暗示を得る所があるであらう。

知多半島の成因に關しては凹地帯に生じたる地盤として考ふべきである。

知多半島の地形に關しては中村教授の説明があり渥美半島の地形の就いては石川先生の研究が既に本誌上に掲載されたる事は讀者の知れる所である。

(四) 赤石楔形帯に就いて

西 本 生

(答) 諏訪盆地、釜無川及び富士川を東邊とし天龍川を西邊とする赤石山脈の全地域を含む三角形の陸塊は本邦地質學の搖籃期に於いて既に地質學者の深い注意を引いた處である。

此の地域は概して花崗岩片麻岩及び古生層等の古き地層より成つて居て日本列島中の最も古き陸塊であつた事は著しい特徴である。然れども天龍川と富士川との間に挾在する所謂赤石楔形地の生じたのは第三紀前半の終りであらうと、考へられる何となれば中生代末又は新生代始めに生じたりと考へらるゝ中央縱斷線は實に此の赤石楔形地の中を高遠町附近から三峯川、小桂川、及び秋葉街道等に沿ひ伊那盆地に平行して其の東側を走つて居り、且つ伊那盆地中には新第三紀の堆

積があるからである。又東邊をなす斷層も矢部教授の意見に依れば第三紀前半の末よりも新しくない様に考へられる。

赤石楔形地の地貌は大局より觀察すれば西方より東方に至るに従つて高距を増して居る。且つ此の赤石山地中の山峯頂上には屢々准平原の遺跡が認められ、此の准平原化作用は第三紀前半に行はれたるものなる事が辻村學士に依つて研究されて居るから、赤石山地は恐らく第三紀後半中に這入つてから一大傾動を行つたものであつて、准平原化作用は可成海面に近い高距に於いて若し完全すると假定すれば第三紀後半中に於いて赤石山脈東部は恐らく二千數百メートルの隆起をなしたものと考へられる。此の傾動隆起運動が少なくも第四紀に入る迄續いて居た事は諏訪盆地附近に於いて地質學的に大體証明出来るが辻村學士が複斷層崖に就いて論ぜられたる論文の中に赤石山脈の斷層崖が赤石山脈の隆起的發達に依つて作られたものなる事を斷言された處に暗示されて居る。

矢部博士は既に富士川沿岸に於ける第三紀層の異狀なる褶曲より判斷して赤石楔形地が東方に移動せるものと斷定せられた。恐らく赤石山地は傾動しつゝ水平的にも東方に移動せるものであらう。赤石山地東西部を踏査せられたる人々は御倉層が西北に傾斜し宛然古生層が其の上部に來るが如き狀況を呈して居る事實を目撃されるのは恐らく這般の事情に依るものであつて少なくとも御倉層堆積後赤石山地が著しく東方(或は東南方)に壓迫された事は明らかである。但し此の御倉層の西北への傾斜が單に今日の赤石楔形地を構成せる運動と直接に關係したと考へられない。何となれば御倉層は中生層であつて此の處に新生代最初の地殻運動の影響が存在する事を考へられるからである。